

てようとしたのである。それがファシズムという状態で現れたことは何ら不自然なことではない。ファシズムは植民者の専有物ではないのである。

崔は朝鮮を中心とした地域に孕まれていた「普遍」としての「*the park*」思想を提唱することで、「普遍」の原理を帝国日本から「横領」しようとした。それは帝国のイデオロギーの最深部から抵抗の言説を構造化する「内破の戦略」でもあった。「不咸文化」と、その顕現としての檀君信仰という崔の議論は、植民地という現実のなかで帝国の根底を揺さぶる有用な理論的手段になりえた。

しかし、崔の論理は「宗教」概念を用いた抵抗の試みでありつつも、同時にファシズムを定礎するものでもあった。一九三〇年代半ば以降、「東亜新秩序」論を掲げた帝国日本の拡張は、新しい「普遍」原理の樹立を必要とせざるをえなかったが、かつて「不咸文化圏」を主張していた崔の議論は、この作業に的中するものであったのだ。「*the park*」思想は、日本の「古神道」として置き換えられたが、それは帝国日本のファシズムに崔の主張が吸収されたことを意味するのではない。「フル」は「*the park*」の和語形であったが、朝鮮の「風流」すなわち「プル」という「固有信仰」がここに対応していて、「風流」は言い換えれば「神道」となりうるのである。ここで注意しなければならないのは、「朝鮮の固有信仰」と「古神道」を、「普遍」としての「*the park*」の変容された状態としてみなしている点である。帝国日本のファシズムの原理そのものが、「*the park*」に据えられているのである。「*the park*」は「古神道」から、

やがて満州をも内部に抱え込む「大陸神道」へと拡大されていく。

学徒兵に張り合いのある死を誘っていた崔の宗教論は、帝国日本の原理を朝鮮の内側に包摂しようとしたファシストの欲望に他ならなかった。崔によって概念化された「朝鮮の固有信仰」「*the park*」は、帝国日本のイデオロギーを乗り越えて、それを混乱させながら、その彼方において「宗教的普遍性」に担保された全体主義的な企画を実現させようとしていたのである。

パネルの主旨とまとめ

磯 前 順 一

宗教概念論は、欧米のキリスト教社会あるいはポストキリスト教社会でこの十五年以上隆盛をむかえた。その代表的論者であるタラル・アサドによれば、プロテスタントイズムと密接に結びついた宗教概念は〈世俗Ⅱ政治／宗教Ⅱ内面〉といった二分法にもとづくものであり、世俗主義社会の成立と歩みを等しくするものであった。そのような世俗主義は自分たちの社会こそが宗教的に寛容な社会であると同時に民主主義的な社会であり、平等で自由な社会である幻想をひとびとにもたせることを可能とした。それゆえに、個人の内面にもとづいた宗教も信教の自由によって、その社会の構成メンバーには誰にでも等しく保障されるという信念も成立可能になった。

しかし、そのような信教の自由にもとづく世俗主義社会あるいはリベラル民主主義社会が本当に平等で安全な社会であるのか。その社会の内部に果たして劣悪な状況を強いられた弱者は存在しないのか。さらに、その社会に属さない共同体外部の人々に対して暴力的とも言えるような犠牲を強いるようなことはしてこなかったのか、今日では様々な疑問が呈せられている。そのなかで、世俗主義と共犯関係をもつ宗教概念もまた個人の純粋な内面に限定されたものとして、その素晴らしさや可能性を称揚するだけではすまされない状況になっている。

本パネルでは、そのような近年の宗教概念の動きに対して、どのように宗教概念論を政治的な文脈のなかに位置づけ、そのなかにおいてこそ宗教のもつ可能性と限界を両義的に捉えることができるのか、一般の人々の日常における宗教のもつ意味を再考することを試みた。パネル企画者の磯前が『近代日本の宗教言説とその系譜』を刊行したのは二〇〇三年であるが、いまではその叙述の国民国家的な枠組みのもつ限界は明らかになっていった。とくにポストコロナリアル批評の視点が広く共有されるべき視点になっている現状では、日本にとってポストコロナリアルあるいはコロナリアルな議論を確証していく場である東アジアとの関わりを除外することで、宗教概念をめぐる議論はもはや国際的な場では説得性を有さないことは明らかである。とくに日韓併合百年を経て議論が国内外で高まりつつある植民地朝鮮の問題は、この十五年のあいだに自国のナショナリズムを植民地経験と結びつけることで批判的に読み解いてきた韓国の知識人の活動が英語圏のポストコロナリアル知識人の研究成果に負

けないほどの高まりを示していることもあって、日本のみならず国際的な宗教概念をめぐる議論の場にも新たな成果をもたらすことであろう。

再度確認するならば、コメンテータの桂島宣弘が述べているように、宗教概念論は、一国的な宗教制度史・移植史に止まるかぎりには、帝国Ⅱ植民地的な構造を常に内に孕んでのみ成立してきた近代の、その不可分の一翼として存在してきた宗教・信仰の政治性に迫ることはできないだろう。近代日本の宗教概念の問題は、西洋・日本・東アジアを貫いての共時的関係態の中で、動態的に分析されることで、その提起が元来有していた研究で澄まされた攻撃性を取り戻すことになるというのが、本パネルにおける各報告の重要なメッセージである。この意味では、宗教概念の問題は、当初からトランスナショナルな分析を避けては成立し得ないことを、われわれに告げている。